# 「公共」支え合う社会に

論 民の力 8

関西の活性化に向け、「民の力」をいかに高め、引き出し、生かしていくか。シリーズの一環として、関西よみうり懇話会の会員4人による座談会を10月25日、大阪市北区の読売新聞大阪本社で開いた。懇話会幹事の井上章一・国際日本文化研究センター教授を司会に、木ノ下智恵子・大阪大准教授、栗本智代・大阪ガスエネルギー・文化研究所主席研究員、宮本又郎・大阪大名誉教授が語り合った。

## 座談会

井上　幅広い視点から「民の力」を考えたいと思います。まず、これまでの取り組みを紹介してください。

木ノ下　大阪市北区の京阪なにわ橋駅構内の「アートエリアB1」で10年前から、現代美術や科学などに関する事業の企画を担当しています。アートエリアは、京阪ホールディングス、大阪大、神戸のNPO法人の3者による共同運営です。複数の「民」が連携してプロジェクトを展開する例は、民の力を生かす上で参考になるかもしれません。

栗本　関西各地の歴史や文化を語りや映像などで紹介する「語りベシアター」を1994年から続けています。地域の魅力を掘り起こして物語として編集し、伝える活動です。これまで大阪や神戸で約60回開き、語りベシアターの担い手を育成するワークショップも行っています。地域の活性化には街への愛着や誇りを育むことが大切です。

井上　今、民の力が求められている背景には何があるでしょうか。

宮本　一つには、国や自治体の財政問題から、公共的な役割を行政だけが担うことが難しくなっていることがあります。市民や企業、NPOなども、「公共」を分担しようということです。

また、行政サービスは公平・平等が原則なので、どうしても画一的になります。しかし、市民の価値観が多様化し、例えば、行政がどんな文化活動を支援するかについて様々な考え方がある。相続税だと使い道が国任せになるから、自分で決めて生前に寄付する人もいます。公共的なものに私的な「民」の感覚を生かそうという流れがあります。

いのうえ・しょういち　京都市出身。京都大工学部卒。専門は建築史、意匠論。風俗史や美人論、阪神タイガースと幅広く論じる。著書に「京都ぎらい」「日本の醜さについて　都市とエゴイズム」など。63歳。

## 文化に情熱注いで

井上　近代の大阪では、民間の篤志家が中之島の中央公会堂など、多くの文化施設を寄付しました。今は株主への配慮もあり、大企業が文化事業にお金を出すのが容易ではなくなっています。

栗本　企業のトップクラスのなかに、文楽や歌舞伎、ミュージカルを一度も見たことがないという人も多いという話を聞きます。劇団四季の名前は知っていても、「大阪でやっているの？」と言う人もいるそうです。会社の決定権を持つ人々が古典芸能を含む芸術文化、地域文化を理解することが大切です。

関西の「民の力」について議論する（左から）宮本又郎、井上章一、栗本智代、木ノ下智恵子の各氏＝杉田歳也撮影

木ノ下　大阪・北加賀屋では地元の不動産会社が造船工場の跡地や空き家などを、アーティストやクリエイターに提供し、地域の活性化に取り組んでいます。中堅、中小のオーナー企業、つまり「個の力」が強い企業が、文化への情熱を注いでくれれば、かなり違ってくると思います。

井上　ただ、オーナー企業は今後、そうそう増えないかもしれない。やはり個々の志のある民間の人たちが元気になるような手立てを探っていく必要もあります。

栗本　大阪では地域の文化的なイベントに無料か廉価なものが多く、一定以上の料金になると、途端に人が集まらなくなるという現状があります。東京だと小さな催しでも必ず有料なのに、そこそこ人が集まるそうです。芸術や文化を育てるため、イベントには相応のお金を払うという価値観をどのように広めていくかが課題でしょう。

## 魅力ある街作ろう

井上　関西の民の力を高めるためには、大阪の活性化も必要ですね。

宮本　大阪の企業の東京移転を嘆く人もいますが、会社に実力がついたから東京に進出するんだと祝福した方がいい。日本のプロ野球で活躍したダルビッシュ有選手や大谷翔平選手が米大リーグに渡るのと同じです。

問題は、東京へ向かう人材が育っていない点です。そうすると、よそから来てもらわないといけない。そもそも大阪は「よそ者」に目を覚まされる街です。大阪企業家ミュージアムでは、大阪で活躍した企業家105人の功績を紹介していますが、大阪生まれは20人しかいません。

井上　よそから人が来るというのは、大阪に魅力があったということですね。

宮本　外から見た人が「大阪は面白い街だ」と思うようなイメージづくりに、「民」と行政が連携して力を入れなければなりません。

木ノ下　私の経験では、東京から来たアーティストに「大阪は自由でいいね」と言われることもあります。「アートエリアB1」がスタートする時にも感じましたが、結果はどうあれ、やってみようという気風は残っていると思います。かつて「天下の台所」だった大阪が「天下の実験場」になればと思います。

宮本　産業の面では、大阪の企業は戦後、安くて良いモノを大量に生産して販売することで成長を続けてきました。大阪は元々が問屋の街ということもありますが、個々の消費者を意識して個別性やデザイン性を追求するのが苦手です。今の時代、それでは競争力を保つことは難しい。その弱みをどう克服していくかも問われています。

■大阪の企業の東京移転　民間の信用調査会社の帝国データバンク大阪支社の調査では、2017年に大阪府外に本社を移した企業は206社、府内に転入したのは145社で、差し引き61社の「転出超過」だった。転出先は東京都が3年連続で最多の60社で、全体の29・1％を占めた。兵庫県が54社（26・2％）、奈良県が29社（14・1％）と続いた。08～17年の10年間の転出超過数の累計は748社。1997～06年の10年間の1300社に比べると、減少傾向にある。

## シニアの力活用を

井上　改めて関西の民の力への期待を。

宮本　江戸時代の大坂で民の力を発揮したのは、そこに住んで街を愛し、街づくりへの責任感を持った町人です。近代以降、多くが郊外に移り住み、街の真ん中から人がいなくなってしまった。これからは中心部の企業やNPOの人々が「現代の町民」として活躍してほしいですね。

栗本　語りベシアターのワークショップには、映像編集の優れた技術を持っていたり、歴史に非常に精通していたりするシニアが発表の場を求めて集まってきます。このエネルギーこそが民の力と言えます。シニアの力を引き出すことによって、関西は健康長寿ナンバーワンを目指してはどうでしょう。知的刺激に満ちた遊びや文化を享受しやすい社会が関西にあると全国に発信していけば、さらに住みたい街になります。

木ノ下　世界的に見ても、豊かな歴史を持つ地域ほど、新しいものを積極的に取り入れてきました。京都、大阪、奈良、神戸がある関西もその土壌があるはずです。文化や芸術に限らず、民間の様々な試みを許容し、異なる視点を受け入れることが地域を元気にします。誰かが少し変わったことをやっても、それを認める度量を示すことも、民の力だと思います。

井上　文化にせよ、街づくりにせよ、関西のいい点を守り、育てようという「民」の合意と決意がこれからの時代、ますます必要になってくるのではないでしょうか。

きのした・ちえこ　大阪市出身。神戸芸術工科大大学院修了。神戸アートビレッジセンター勤務を経て2005年に大阪大へ。社会との交流を図る共創機構の社学共創フロンティア部門長を務める。47歳。

くりもと・ともよ　兵庫県西宮市出身。奈良女子大家政学部を卒業後、大阪ガスに入社。2000年から現職。関西の地域ブランドを意識した、まち歩きコースや観光ルートの開発にも取り組んでいる。53歳。

みやもと・またお　福岡市出身。神戸大卒。大阪大、関西学院大の教授を歴任。大阪商工会議所の大阪企業家ミュージアムの館長。専門は日本経済史。著書に「商都大阪をつくった男　五代友厚」など。75歳。

座談会出席者（50音順、敬称略）

| | |
|---|---|
| 井上章一 | 国際日本文化研究センター教授（司会） |
| 木ノ下智恵子 | 大阪大准教授 |
| 栗本智代 | 大阪ガスエネルギー・文化研究所主席研究員 |
| 宮本又郎 | 大阪大名誉教授 |